雇われシンデレラ

白兎 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雇われシンデレラ

【Ｎコード】
Ｎ７９８１Ｐ

【作者名】
白兎　成

【あらすじ】
世の中は砂糖菓子のように甘くはない。
お金の為に女中仕事＆いびりを耐えます！夢は賃貸脱出＆隠居生活！
そんな私が若旦那のお世話に抜擢！？
枯れ気味少女と愉快犯の少年が巻き起こすラブギャグコメディー…
になる予定。

プロローグ（前書き）

連載は投稿しないと言いつつ…やってしまいましたごめんなさい。
突如浮かんだ彼女の職業、これは書いたら楽しいな…と。
連載が苦手な私なので不定期ですが、どうぞ彼女ともどもよろしくお願いします。

プロローグ

「何なのよ、この部屋は！！！家畜の方がまだ綺麗好きだわ…。」
私の職業は女中（メイド）。しかし、これをタダのメイドと言う勿れ。
えぇ、発言が女中らしくないことは重々承知しております。
…そこではありませんので安心してくださいまし。
でも、でもなのよ？これは無いじゃない、タダなら！
美しい絨毯（正確には美しかった）には赤い染み…流石に血ではないだろう。
指で掬って匂う…ケチャップ。毛足の長い高級絨毯との相性は最悪。
それだけなら可愛いものよ？誰しも失敗くらいあるしね。
「パンかなんかと間違えたのかしら、ね？」
マスタード、ピクルス、チーズ（犯行時にはとろとろに溶けた状態と思われる）、レタス、ハンバーグ。
はて、気位の高いあの方たちがこれらを手に入れられる場所に出向…けるわね。

「あーあ、昼無し決定」

小さく呟く声が聞こえたのかどうかは分からないが…クスクス笑う声がする。
無視なさい、此処のお給金がどれだけいいか思い出すのよ。
固く目を瞑り、吊り上がる眉尻を無理やり下げる。
薄く瞳を開けて、
「…」

感情を塗り替える。
ぽろぽろ涙を流す。

相手を満足させなさい、そうすれば嵐は去る。
嵐を耐えれば、夢を掴めるわ。

目指せ！賃貸脱出、隠居生活☆

彼女は玩具（前書き）

プロローグを読んでまた来てくださった方、ありがとうございます。
より楽しく読んでいただけるよう頑張っていきますのでよろしくお願いします。

彼女は玩具

1.

純白が美しかった絨毯を見てため息をつかざるを得ない。
「これ、洗うのは別にいいんだけど…」
仕事だもの。
「拾い食いは、アウトよね…」
それを分かっててやってるのよ、あの方たちは。

女中に与えられる昼食時間は交代制。
今の時間は2時。
お腹も空く頃なのだが…。
「パンがないと思ったらこんなところに」
目の前には靴跡が残るパン。
おろおろと見ているのは偶然休憩が同じになった平民の女の子。
貴族様が支配するこの世界は爵位と金が全て。
それはこのお屋敷に入った時点で誰もが分かっている。
私も、勿論彼女(あの娘)も。
だから見ているだけなのだ。
怨むべくは名ばかりの爵位、愛すべき父の手腕の無さ。

「あの、お口に合わないでしょうけれど…」

平民の子が私に話しかけてくれる筈がない。
「って…え？」
「少しでも食べておかないと…出しゃばってごめんなさいっ！！」
今まで、話したこともないのに。

「どうして？」
彼女だってお腹も空いているだろうし、家計が苦しいから奉公に来ている筈。
半端モノって笑わない？それは、どうして？

『名ばかり貴族が来ましたわよ』
『見て、あのドレス。一昔前のものでなくて？』
『執事、女中も皆解雇したと聞いてますわ』
『あぁ、だからあんな手をしていますのね』

『貴族のくせに』
『あれじゃ私たちの方がましだわ』
『爵位があってもあんな風じゃあねぇ』

『『貴族（どちら）と平民に属していても半端だわ。』』

「大丈夫ですか？」
まじまじと見つめられ、私も相手を見つめ返す。
茶金の癖毛が健康的な色をした顔にかかる。
明るい茶色が私を見返していて気がついた。
そうだ、この娘にはあの蔑んだような暗い色がない。

「大丈夫よ、ありがとう」

どうしても何も、彼女には普通のこと。
きっと聞いても困らせるだけなんだろうと思った。

「でも、何か食べなくちゃ…今日は私たち夜勤の筈でしょう？」
パンを半分に割り、少々強引に握らせた。

受け取らなければ彼女も食べない。
目が雄弁に物語っていた。
私にとってありがたい申し出でもあるし、素直にいただくとしよう。
「ありがとう」

「私はノアール＝フェリトリアよ」
「知ってるわ、よく聞くもの…」
良い噂でないことは知っている。

人ははみだし者の私をこう呼ぶ。
「ストレス発散のための『玩具』でしょう？」

彼の始まり（前書き）

続読ありがとうございます。
やっとお話が動きます。

彼の始まり

2.

「何だこの項目は」
頭を抱えずに何をしろと？
ー玩具ー
正確にはストレス発散用の女中。
彼女の給料は一般の女中達と一桁違う。
…与えすぎではないか？
歴史だけは長いクジェトリム家の存続に力を入れているお、ゴホン僕としては非常に頭が痛い。
だいたい、母姉の無駄遣いが家が傾く最大の理由なのだ。
夜会の度にドレス、宝飾品を買い、着飾る。
二度目に袖を通すこともないのに最高級品をほしがるのだ。
「…今日こそ」

「仕方ないわ、家は没落しかけてるもの」
何でこんな目にあっても仕事を続けているの、という質問に答える。
「頑張るしかないのよ、家族を愛しているから」
だから、辞めるわけにはいかないの。

「失礼いたします」
ドアの前に立ち止まり、中にいるであろう奥様に声をかける。

「？」
カツカツと足音がする。
おかしい、普通なら入室の許可が口頭ですぐに下りるのに。
今日はいつもと違う。
「どうぞ、お入りください」
飛び込んできたのは空に輝く銀。
柔らかな物腰は気品を漂わせる。
品定めする目、皆が私を見る目、けれどどこか違うその目で執事の姿をしていた男は油断なくこちらを見ていた。
しかし、私の仕事は奥様の夜食の給仕をすることであって、この男は全くもって関係ない。

「奥様、準備ができました」

自分が見ている中、完璧な所作で夜食の準備を終えた彼女は俺の姿が見えないかのように振る舞う。
予想外だった。
動きの一つ一つが洗練されている。
予想外だった筈の俺に気を散らすこともなく。
下働き（と言っても母や姉の世話をしている時点でただの下働きではない。扱いは下働きより酷いようだが）で終わらせるのには惜しい。

「奥様、私はこれで下がらせて頂きます」
これまた美しい礼をして扉（こちら）へ歩いてくる。
「　　」
「！？」
あぁ、おもしろい。
ここで終わらせるには惜しい奴だ。

『私は合格ですか、若旦那様？』

開幕のベルが鳴る（前書き）

続読ありがとうございます。
これからもお付き合いいただけたら嬉しいです。
今回は何か黒いものを感じます…。

開幕のベルが鳴る

3.

本日のお勤めもつつがなく終えたと言える。
予想外の人が現れた以外は。
「いつか来るとは思っていたけれど」
反って遅かったくらいだが。
クジェトリム伯爵邸では夜勤の女中の為に部屋を貸している。
その部屋も落ち着いた色調で品がある。
そういう当主（といっても若旦那様の計らいだ）の気質も気に入っている。
金持ちは自分の価値を高く見せるために飾りがちだが、品の良さとはき違えている節がある人間が多い…色々な貴族のもとで働いてきた中で感じてきたものだ。
そして、他に気にしていることがある。

「すっごくガードが堅いのよ、ここの人達」

女中達が皆、洗練されている。
それもきちんとチェックが入れられているからだが。
その情報源が分からなかった。
まさか当主が全ての女中を見張れる筈がない。
誰かいる筈だ。
彼の右腕…きっと今日を選んで動いている。
確信はノック音で固まった。

「ノアール＝フェリトリア、起きていますか？」

「はい。…侍女長様」
「身支度をして付いてきなさい」
軽く女中服を整え、立ち上がり、扉を開いた。

侍女長の後ろに付いて行きながら、目線は隅までいきわたらせる。
調度品の良さからおそらく向かうは当主の部屋。
相手は私に気が付いている。
私は彼のどこまで気が付けただろう？
今までのお屋敷ではもっと力を抜いていた。
けれど、あの銀は読めない。
引き下がるわけにはいかない。
引き下がるには早すぎる…負けてはいけない。

侍女長が立ち止った扉には獲物を狙う猛獣の鋭利さ、人を惹き付けずにはいられない力を併せ持った銀色と温かみのある中に強さをはらんだ亜麻色のオッドアイを持った豹が彫られていた。
その扉を侍女長が叩き、一歩下がった。

「入れ」

扉を開いた先にいたのは銀の瞳。
「ジストール様、私は下がらせていただきます」
「あぁ。今日はもう休んでくれていい」
静かに礼をした彼女は私を中に促し、後ろへ下がった。
やはり、侍女長ではない。

「ノアール＝フェリトリア、お前の目的はなんだ」
単刀直入な物言いに驚く。
噂では慎重な性格と聞いていたのだが。
「フェリトリア家の建てなおし…言葉だけではあなたと大差あり

ません」
言葉を隠さない物言いに思ったより馬が合いそうだと思う。
「お前は女にしとくにはもったいないな」
この人も色々調べたに違いない。
雇い主として知りえぬ場所まで…彼女に指示して。
「もったいないお言葉ですわ」
「あの母姉(親子)に使われるのも非常にもったいないとも報告を受けた」
この人は退屈している。
もちろん、本気で伯爵家の建てなおしを目指している。
けれど、この人はゲームをしている。
私と一緒の目的を持ちながら、獰猛な、何も失うものは無いという目をしている。
ここにいたら、彼の駒になるんだろうな…と思い当った。
すぐここを離れれば逃げられるとも思う。
不思議とそうする気もないが。
「私をどうしたいのですか」
聞けば戻れない。
もとより、戻る道はない。
「アン、出てこい」
目の前には温かみのある亜麻色。
昼は茶に見えたが、揺れる蝋燭の前では亜麻色に輝いていた。
オッドアイの豹を見た時からちらつく影の本体が姿を現した。

平民と思っていたあの娘が彼の右腕。
間違いなく、ここから出られなくなった。
ゲーム終了(目的達成)の音が鳴るまで走り続けるのだろう。

開幕のベルが鳴る（後書き）

なんか重くなりましたが…ギャグってこんなんじゃないような。
キャラ達が先走りして、それを打ってる状態ですね！？
色々軌道修正しながら頑張っていきます。
…なんか飼い犬に散歩させられてる飼い主な気分です。

つながり（前書き）

続読ありがとうございます。
なぜかどちらも腹黒いです…駆け引きとかこういうのを書くつもりではなかったのですが。
とりあえず、頑張って投稿しますのでよろしくお願いします。

つながり

4.

「驚かないのね」
アンと呼ばれた少女が沈黙を破った。
「想像はしておりましたので」
驚くと言うよりも彼女が本当に平民の少女なのか、若旦那との関係性に気持ちが傾く。

「あら、気付かれないと自信があったのだけど」

そう言って笑う姿に女中服はちぐはぐに見えた。
「ひとつひとつの仕草が綺麗すぎましたから…決定打は扉の虎、でしたが」
クジェトリム伯爵家の紋章は虎。
扉にはめられた石は銀と琥珀…つまり、若旦那と彼女を現す。
そこから推測するに、
「失礼ですが、お二人は御兄妹でしょうか」
疑問、というより確信。
おそらく彼女は、

「そうよ。兄様とは半分の血しか繋がってないけど」

妾の娘。
権力者にはよくあることだ。
というか、一夫一妻の貴族の家庭はほぼ無に等しい。
伯爵の髪、瞳はともに銀。

奥様の髪は金、瞳は青。
彼女の瞳は髪、瞳ともに茶色。
色素なら繋がりは得られないが、
「顔立ちが伯爵さま譲りでいらっしゃいますわ」
煩わしげに髪を払う姿、貴族の令嬢にしては短い髪。
彼女はその色を嫌いなのだろう。
「…」
「それで、若旦那様は何を仰りたいのでしょうか？」
分かり切っていた。
隠していたであろう情報網を私にバラした。
選択肢は二つ。
「選べ」
目をそらしたら負けだと自分に言い聞かせ、言葉を待つ。
「死ぬか、俺に従うか」
傲慢な人間だ。
しかし、玉座に座る一国の王のようにも見える。
「私は私の進む道がございます」
けれど、私は膝を折らない。
「その上で力になれるのであれば、一介の女中として力になりましょう」

「アン」
閉じた扉から目を逸らさずに忠実な妹(部下)に声をかけた。
「彼女、膝を折りませんでしたわね」
言いたいことをすぐに察したようだった。
「だが、断りはしなかった…制限付きだったが」
「えぇ」
「面白いゲームになりそうじゃないか」
「分かりました、準備をしてまいりますので失礼しますわ」

ツカエルモノ（前書き）

続読ありがとうございます。
ようやく話が動いた…というか勝手に動き出したというか。
とりあえず、開幕です。

ツカエルモノ

5.

早朝、私は自分の住まいに帰りついた。
夜勤明けの今日は非番だ。

「…これからあの二人と腹の探り合いなわけね」

きっと精神的に疲れることこの上ないだろう。
だるさを感じながらもいつものように机に向かう。

一女にしとくにはもったいないな

言われた言葉をゆっくりと噛み締める。
言われる度に思うのだ。

「そんなことないわ」

皆間違っている。
私は爵位を継いで女子爵になりたいわけではない。

「お姉ちゃん、頑張るからね」

『お母様、林檎持ってきたよ』

窓から目線を外し、私を見て微笑むその表情を見ていると幸せだった。

『ノア』

私の名前を愛おしいそうに紡ぐその声がくすぐったかった。
優しく私の頭を撫でる温かい手が好き。

『もうすぐお姉ちゃんになるのね』
膨らんだお腹を優しく撫でるその手がなんだか寂しかった。
「弟かしら、妹かしら」

―知ってるよ

『守ってあげてね』

―うん、守るから…守るから、

「おはようございます」

用意された制服に腕を通す。
一昨日まで来ていたものとは生地が違う。
今日からどのような扱いになるのか片鱗が見える。
目の前の少女…アンと呼ばれていた彼女が同じものを着て現れる。

「ノア、と呼ぶわね」
「どうぞ」
「今日からあなたはジストール様付きの侍女」

「若旦那様、朝食をお持ちいたしました」
入室の許可が下り、カートを運び入れる。
「ノアール」
「何でしょう？」
不機嫌そうに書類を睨んでいた彼が視線を上げる。
「尊敬の感じられない敬称はいらない」
思わず目を見開く。
「私は貴方様に仕えることを身に余る光栄と思っておりますが…」
「白々しい。ならばこの報告書は何だ」
ひらひらと振ってみせるそれは私が提出したものだ。
「気に入りませんでした？」
夜勤明けの休日に纏め上げさせられたものだ。
出来は上々だが。
「続けてみろ」

「思っておりますが、少々人をこき使いすぎかと」
にっこりと笑う。
「それはこれから苦労をかけるな？」
手は止めず着々と食事の用意は出来ていく。
「なんなりと。誠心誠意お仕えさせて頂きますわ」

二人がにっこり笑いあう冬の朝はブリザードが吹く

ツカエルモノ（後書き）

お二人さん、何か真っ黒です。
どうして君らはそうなるの、って感じです。
ジストール（若旦那）人使い荒らいですよ、ノアも思うままには動いてやらないという…主従って感じじゃないですね…。
ちなみにタイトルには二つの漢字をあてられます。

雇われシンデレラ（前書き）

今回はかなり短いです。
というのも、次回との区切りを付けたかったからなんですが。

続読して下さっている方、本当にありがとうございます。
もっと頑張りますのでこれからもよろしくお願いします。

6.

「お前、今日は俺に付いてこい」

「…」

仮にも主である方に、は？と返しそうになった。

耐えきった私に拍手したくなる。

「若旦那様、私の話を聞いておられましたか？」

たった今、今日の予定を報告したばかりだ。

また、だ。

まだ数日しか、と言っても私が若旦那の世話をしているのは三度の食事の給仕のみだけど…私が口を挟むと眉間に皺を寄せる。

「…」

どうやら、配下の者が自分の言うことに『Ｙｅｓ』で答えないことが不満らしい。

というか、私が規格外なだけなのだろうけど。

私が頷くまで沈黙を守るから嫌なのだ。

「…理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

私は確かに若旦那付きの侍女に任命され、その任を拝命した。

けれど、

『お前は引き続きあの母姉を見張れ』

実際の仕事は大して変わらない。
あの嫌がらせも相変わらずなのだ。
「アンを別件で動かしてるからな、動ける奴がいない」

『…それは、あの玩具扱いも含むものですか』
『勿論』

ニッコリと笑う顔に殺意がわいた。
『あれを耐えられるのはお前くらいだろう』

「今日は王宮に出掛けることになってる…アンと別行動でな」
「お付きのものでしたら私で無くとも…！」
王宮という言葉に動揺してしまったらしい。
思わず声が荒くなった。

「…失礼しました」
すぐさま詫びを入れ、先を促す。

「俺はお前が適任と判断した。…せいぜい俺の手足となるんだな、シンデレラ」

『あの仕打ちを耐え、俺に情報をもたらす…差し詰め、〈雇われシンデレラ〉というところか』

「私はお前に意見を求めているわけではない。ここは従え」
侍女の仕事の一環だ、とまで言われてしまえばどうしようもない。

渋々、馬車に乗り、出立した…嫌な予感を心に抱えて。

雇われシンデレラ（後書き）

私の予想外な所へ行く二人組に引っ張られ追いかける…というか引きずられています。

お気に入り登録がいつの間にやら１０超えてました！！

更新のたびに遊びに来てくれる皆さんに感謝感謝です。

若旦那と猫と少年（前書き）

続読ありがとうございます。
前話の謎の端々が見えてきたらいいなと思います。

若旦那と猫と少年

7.

カタコトと馬車が揺れていた振動が小さくなり、王宮へ向かう一本道に入ったのだと分かった。

目の前で体を縮めるそいつは不機嫌さを隠さない。

まぁ、王宮の狸どもを考えれば分かりやすく、好ましい態度なのかもしれない。

コイツは気に入らなければ口答えはするし、女中らしくない。

あえて言えば人に馴れない（人に媚を売ることの無い）気ままな猫のようだ。

主である俺に最後は従う辺りは弁えているのかもしれないが…。

気に入らない。

今まで、自分を尊敬の眼差しで見るもの（ソレはそういう風に振る舞っているのだが）や恐れる者にしか会ったことがないからかもしれない。

心ない敬称に苛立ちは募る。

しかし、今の様子を見るととてもではないがそんな気持ちは起きなかった。

「そんなに王宮を嫌がるのは何でだ」

王宮に近づくにつれ蒼褪めて見えるソイツに同情心でもわいてしまったのかもしれない。

「何でもございません、若旦那様」
さっきから一本調子で変わらないそれに溜息が出そうだった。

何故こんな姿をして、馬車になんて乗っているのだろう？
というか、この際姿はどうでもいい。
第一の問題は『どうして王宮に行こうとしているのだろう？』だ。
思わず皺になるのも忘れ、ズボンを握った。

「クジェトリム伯爵の長子、ジストール＝フェン＝クジェトリムとその小姓だ。登城許可を」

思いのほか簡単に登城許可が下りた所から考えると若旦那は誰かに呼び出されたのかもしれない。
お願いだから何事もなくこの門を出られるようにと願ったりしてみた。

「何とか終わってくれそうだ」

自分の姿を見てしみじみと思う。
若旦那が相手の貴族が待っているという部屋に入って時間が経つ程に頭が冷えてきた。
…この姿を見て私だと分かる人間が王宮に何人といる筈がない。

浮かぶ人間もいるが、まさか私がこんな姿で王宮に上がるとは考えまい。
そう思うとかなり先程までの自分が馬鹿らしく思えた。

パァンッ

突然、隣室から聞こえたその音に思わず扉にタックルをするような勢いで飛びこむ。

「若旦那、何事ですか！？」
ガラス片が部屋中に散らばるその部屋の惨状、人物に目を見開く。

「何事ですか、じゃないだろう…」

「お待ちください」
被ったガラス片を素手で払い落そうとする主を止め、自分の手で払う。
第二撃が来るのは判り切っていた。

聞いたことがある。

若くして台頭してきたある男は周りの貴族から妬まれている。
賢い王子の寵愛を受けており、家庭教師もしている。
誰にも知られている筈の無いそれを知っていることのどうこうはこの際関係の無いこと。
相手は若旦那を狙うことはあっても他を狙うことは無い。
ならば、やることは一つ。

「行きますよ、若旦那」

狙いはあなたです、そう言って手を引き駆けだした。

すれ違いざまに、

「いくらアンタでもなんかあったら許さないわ」

そう言うことも忘れなかった。

「だってさ、ブランク。相変わらずノアは過激だよね」

そういうとこが面白いんだけどさ、そう笑う。

「そんなこと言ったら怒ると思うよ…」

くすくす笑う彼はすぐさま表情を変えて反応にきょとんとしているだろう衛兵たちに指示を飛ばす。

「お前達の仕事は何だ？我らに危害を加えに来た輩をみすみす逃す気か？」

秘密部屋に隠れていたその人たちが彼の『追え』の指示に慌てて飛び出したのに再び笑う姿を見て、ぽつりと漏らした。

「僕、いつだって思うんだ。僕らといる人たちはとても苦労するんだろうなって」

その先に君が言う言葉も分かっちゃってる僕もどうかと思うんだけど。

「使える者は上手に使う。使える立場にあるんだから当然のことだろう？」

若旦那と猫と少年（後書き）

問題勃発です。
部屋に残った二人のうち一人は見当が付いたかと思われます。
次回は飛び出していった二人を追っかけます！！
アンタの言葉に二つ意味があるのは分かっていただけたでしょうか？

袋の鼠、捕らえるは…（前書き）

続読ありがとうございます。
今回はノアとジストールを追いかけます。

袋の鼠、捕らえるは…

8.

「どこまで行く気だ？」
かなりの速さで駆けているのに息も切らさず隣を走る男を見やり、笑う。
「どこでもないですけど何か？」
何もかもが気に入らない。
王宮にいることも、この姿でいるのも、最悪な相手に出会ったことも、隣に並ぶこの男も。
だから、自分はすこぶる機嫌が悪い。

「なんなら、ここで白黒つけてもかまいませんが」

足を止め振り返る。
「どうせ相手は三流ですし？」
元々何かおかしいと思っていた。
武器になりそうなものは限られているが、幸いなことにいつもと同じ、守るのは一人。

周りは人気の無い廊下。
散らばるはガラス片。
壁には王家の紋章を彫った実用には向かない銀の盾と矛。

「あーあ、こんなことしたらまたお説教ものだよ…」

躊躇いもなく矛を掴み、盾を若旦那に投げた。

危なげもなく受け取る様子に舌打ちしたくなる。

あちこち走りまわり、何度も同じような道をノアに先導されながら走る。
何度も頭上で割れるガラスをものともせずどんどん先へ進んでいく。
王宮にはよく来るのだが、こんな場所は歩いたことは無い。
それをコイツは確かな足取りで走る。

「どこまで行く気だ？」

隣を走りだしてからこちらを向くことの無かった、ノアが笑った。
深く帽子をかぶっているせいで口元しか分からないがとても暗い笑みだった。
元から変わった奴で、仮にも主である俺に皮肉気に笑う。
そんなもの大したことではなかった。
今、彼女は怒っている。
こちらとて敵意をここまで見せられるとは思わなかった。

『気付いてやがる』

腹に一物持った人間だとは思っていたが、ここまでとは。
甘く見ていたようだ、〈認識を改めるべき〉とノアール＝フェリトリアの調査票に書き込む。

「なんなら、ここで白黒つけてもかまいませんが」

足を止めた彼女は壁にかかっていた盾を俺に投げた…少しばかり、
恨みが伝わってくるようだった。

ガラス片を見やり、笑った。
「派手にやってくれたね、暗殺者共」
拾ったガラス片を強く握り、窓の桟を避け、投げる。
カサリと何かが動く音がした。
少しすると、外が騒がしくなり人の声が聞こえた。

「お前たちは袋の鼠だよ」

獣の声が聞こえ、悲鳴が聞こえる。
それとともに何かが壁をこする音がした。
矛を構え笑う。嗤う。

「せいぜい、後悔しなよ」

私を怒らせたこと。
這い上ってきて二メートル以上の高さの窓から人が落ちてきた。

「ひっ」

実用的ではないとはいえ、刃は本物。
切っ先を向けられたソイツは固まった…様に見えた。

「入ってこい、中にいるのは餓鬼一人！外よりましだっ！！」

あちこちから音が響く。

きっと、全員がこちらに入ってくる。

「多勢に無勢だ。さぁ、おちびさんはどうするかな？」
勝ち誇ったソイツに顔を強張らせた。

全員で5人。
一人で、しかも隙ができやすい矛では勝ち目がない。

その場に緊張が走った。

袋の鼠、捕らえるは…（後書き）

あえて、ピンチで終わらせます。
ドキドキしながら読んでもらいたいシーンなのですが力不足です、
ごめんなさい。
ノアは色々普通じゃない令嬢です。
濃すぎるかなぁ…と思うこの頃です。

追う者、捕らえる者

9.

緊張の中、誰も物音をたてはしない。
敵は前方に5人。
俺は背に庇われる立ち位置にいた。

体を傾け、全力で走る。
後ろから彼女も走ってきたようだ。
一瞬遅れた追手もやってきているらしいバラついた足音が聞こえる。

『全力でまっすぐ走れ。後ろは振り向くな』

指示通りに走り続ける男を見て焦る。
正装なんて動き辛いにも程がある。
比べて相手は軽量化された、動き回るための装束。
バラついた足音が迫る。
いつまでもつか分からない…そう思った時、衝撃が走った。

「まさか、そんなに打つとは思わなかったわよ」
「嘘だろ？お前の時、清々しい顔は今までで一番だったぞ？」
「ね、先生が休んでるんだからちょっと静かにしようよー」

聞き覚えのある声に意識が浮きあがる。

「煩いわね！だいたい近衛が来るのが遅いからああするしかなかったんじゃないの？」

「ふむ？それはそれは。他人に頼らなければ人一人守れない…そんな脆弱な奴にブランは任せられないな。ブラン、ウチに来い」

「なっ！！ブランを欲望まみれの王宮に置くなんて許さないわよ！」

「ちょ、二人とも…あっ」

声が頭に響く。

思わずこめかみを押さえると、

「駄目ですよ、先生！」

その手を押さえたのは最近、生徒になった少年だった。

「包帯が取れちゃいますから…」

少女と見紛う程繊細な顔立ち、穏やかな緑の瞳、それを縁取るは金。

お伽噺の中から抜け出た容姿を持つ彼はとても儚く見える。

外見を裏切らず、病弱であるために城で暮らしているという彼は爆弾を落とした。

「…姉さん、ほら。ちゃんと謝らなくちゃ駄目だよ…」

「だって仕方ないじゃないのよ、あの状況だったんだもの」

そうでしょ、ブラン？そう言いながら拗ねて見せる姉（彼女）は自分の知っているノアとまるで別人だった。

「…とりあえず、整理させてくれないか」

あの衝撃は頭を強かに打ったものらしい。
原因は追手に追いつかれそうになった所をノアが突き飛ばしたからだとのこと（とてもいい笑顔だったという）。
「あそこは後宮の跡なのよ…王妃の座争いで暗殺が相次いだから暗殺者の侵入を防ぐために罠がたくさんあるの」
あえてそこへ奴らを誘き寄せ、罠の一つに嵌めたらしい。

「そんな大雑把な説明で俺が納得すると思うか？」

「…しては貰えないでしょうね」
「お前の話が本当だとして、都合良くアイツらがまとめて罠にかかるとは考えにくい」
あの時、あの廊下に入ってこらざるを得ないようにした、違うか？
「無理なんじゃない？…現次期フェリトリア当主？この人が引かないってのは分かってるんだろう？」

「殿下…それは話せ、ということでしょうか」
「別に、命令のつもりは無いよ？だって僕、まだ王子（子供）だし」
ただ、王はフェリトリアの判断に任せると言っていたことは伝えておこうと思っただけさ。
好き放題に言ってくれる王子に、引き下がりそうにない主（仮）。
溜息は尽きないが、

「殿下、人払いを」
話してみようか…勿論、タダでは返さないが。

「時期も時期です。次期当主となるだろうブランも１３歳」
小さな子供ではない…私からしたらいつまでも保護対象なのだろうが。

「長い話なるでしょうが…退室するなら今のうちです」

「聞かせろ」

ーーー話は初代王の時代にさかのぼります

フェリトリアとは貴族ではありませんでしたーーー

追う者、捕らえる者（後書き）

うーん…何だか、重たいです。
後からどんどん増えて来る設定。
いつの間にかかなり古いお話が絡んできてます。
とりあえず、ノア弟（ブランク）の登場です。

お伽話（前書き）

続読ありがとうございます。
１０話到達です。
これからもよろしくお願いします。

お伽話

１０．

「羊飼いと白金の獣、という話をご存知ですか？」
小さな子供を寝かしつける母親が我が子に歌い聞かせる短いお伽噺だ。
今は王子様とお姫様が登場する話がポピュラーだが、これは真逆をいく。
世の中に知られてない物語。

「知らないが…」

「ではそこから話しましょうか」
毎晩毎晩歌っていた母の語り口を思い出す。

「彼女はステラ、ただの羊飼いの娘」
ブランに毎晩毎晩歌い聞かせたこのお伽噺（裏歴史）。

彼女はステラ、ただの羊飼いの娘。
昼も夜も野を駆け回った。
人の世界に抱かれる平凡な娘。

彼女は森を駆け回り、町を駆け回る。
彼女に寄り添うは一匹。

娘の友は黒の獣だけ。
彼女は獣の言葉に耳を傾ける。

今日は町が賑やかだった。
たくさんの人がいたの。
あんなに人がいたら、誰かいなくなっても分からないね。

獣はステラの傍でまどろむ。
彼女はふと空を見上げた。
青に黒が混ざり、星が瞬いていた。

彼女が草を踏みしめると、蝙蝠は恐れをなして走り去る。

彼女が抱きあげたのは闇に住む白金の獅子。
獅子は怪我で動けない。
ステラは闇の中、獅子は命を取り留めた。

それから、しばらくして若い獅子が野を駆け回るようになったという。
羊飼いの娘はとうとう昼の世界に戻らなかった。

「…意味不明な話でしょう？」
けれど、意味がある。
「これを子供に聞かせるための物語というのには平坦すぎるな」
物語とは娯楽の為に作られ、面白おかしく笑いを誘い、時には涙を誘う。
「普通ならば世の人に忘れられないように波乱万丈な話でも作るだろう」

賢い人だ。そして知っているのだ。

「本当の目的は世の人に伝えることではないからよ」

聞く人間は限られている。

「これは王族とフェリトリア家に語られる物語」

「…」

「殿下はこのような話をたくさん知ってる筈ですけどね」

「まぁな」

「若旦那、フェリトリア家の紋章は何かご存知ですか？」

「犬だったか」

「それが答えです」

獣の声は犬だ。

「私の血のニオイを嗅ぎつけた犬たちが殿下に居場所を告げ、暗殺者共を罠のある廊下に追いつめたんです。…お分かりいただけましたか？」

「ステラはフェリトリア家の祖先に当たり、黒の獣はフェリトリア家の育てている犬たち、闇に住む白金の獅子は王族。ちなみに、闇は欲望渦巻く王宮を指します」

そして、

「蝙蝠は臣下…傷ついた獅子というとクーデターだな」

「その通りです」

若い頃に覇王として名を馳せた初代王にも老いは当然訪れた。
長寿王とも呼ばれた彼の周りは世代交代が進み、初代王はクーデターにより玉座を追われる。
それを保護したのがステラ。
操り人形になった幼い王子を誰かが逃がし、保護する。
その王子は、民の中に隠され、時期を待つ。
逞しく、賢く成長した王子がクーデターを起こす。

3代目の王となった彼に仕え、忠誠心を示した祖先に姓と爵位が贈られたことがフェリトリア家の始まりだ。

「「家臣となった祖先は『私共は平民。過ぎたる力は人を腐らすと身をもって知っております』そう言って一度は辞退したが、」」

「俺の祖先である王は何度も食い下がった」

「で、祖先は根負けして『子爵』／『伯爵』の爵位を受け取った」

お伽話（後書き）

分かりずらいかと思いますが、一応このままで投稿です。
そのうち書き直すかもしれません。
アドバイスなどあればお願いします。

怒れる犬と虎（前書き）

続読ありがとうございます。

怒れる犬と虎

１１．

「納得いただけましたか？」

頷かざるを得ない。

有無を言わせぬという視線に気圧される。

「ならば、今度はこちらから質問させていただきます」

彼女が言いたいことは理解していたし、彼女の推測が正しいことも分かっていた。

「言う必要はないだろう」

完全に分が悪いのだ。

これは、手を誤ったと言うしかない。

「クジェトリム、王家の虎の名を継ぐもの」

『羊飼いと白金の獣』をスムーズに理解したのは似たようなお伽噺を義理母から聞かされていたからだ。

『虎と獅子』という物語だ。

虎と獅子は力を合わせ、世界を纏めていたという。

どちらも強く、周りの動物たちが歯向かうことなど無かった。

次第に虎と獅子は意見が対立するようになり、とうとう虎は姿を見せなくなった。

ところが、長く時が経つにつれて獅子は力を失っていく。

それにつれて獅子への敬意は薄れ、命を狙われるようになる。
それから、しばらくすると獅子も姿を消し、世界は荒れた。

その中で、支持を得る存在が現れる。
若い虎と若い獅子。
獅子に襲い狂う者を叩き潰していく姿は周りに恐怖を与える程であったという。
若い獅子は正しい道を示し、虎はそれを疑わなかったという。
虎は世界が平らかになり、再び背を向けようとしていた。
獅子が吠え、虎は平伏す。
虎は獅子を守り、必ず側に控えたという。

「名を受け継ぐものとして、殿下を巻き込むとはどういうこと？」

家の名を継ぐものとして殿下が生まれてから、王宮に通い、殿下と過ごした。
実の弟のように見てきた彼を危険な目に遭わせた。
回復してきたとは言え、体の弱いブランも巻き込んだ。
私の大切なものを傷つけるものは許さない。
「私を試すなら、もっと違う方法があった」
本当に使える駒か試そうとした。
誰も知る筈の無い勉強会…それが外に漏れた。
それは何故か？
「私を舐めてかかり過ぎよ」

槍を持ち替え、一気に間合いを詰めた。
刃の先には敵の咽もとだった。

怒れる犬と虎（後書き）

今回短いですね、ごめんなさい。

傷（前書き）

大分間が空いてしまいました。ごめんなさい。
懲りずに足を運んでくださった方、本当にありがとうございます。

傷

１２．

金属と金属の触れあう音が甲高く響いた。
喉下すれすれに刃はずらされていたためだ。

「ようやくお出ましですか、メリアンティ嬢」

僅かながら、眉が動く。
世間話をするように穏やかに語りかけてはいるが、内側は身を焦がすような怒りで溢れている。

「流石、虎の血を引く方。女性でも十分に通用されるのですね」

相手に放つ言葉は自分自身にも傷を残した。

背の高い私なら、彼女を押しつぶすことも可能な筈だが槍を引き、一歩下がった。
「殺してやろうと思いましたけど、諦めましょう」
槍を捨て一歩前へ進み出る。
足はアンの前で止まることは無く、男の前まで歩く。
「　　」

ぱんっ

乾いた破裂音がこれでもかと響いた。
「！」

「殿下、先に御前から退出させていただきますわ」
普通なら、許されるものではないが、誰も口を挟むことは無かった。
「…許可する。ノアール、ご苦労だった」

彼女が出て行った後の沈黙を破ったのは殿下だった。
「ああなったら、最後だ。しばらく会うのは避けるしかない」
「…しばらく会って無かったから、こんな別れ方はしたくなかったんだけど」
二人の苦い表情は珍しかった。
しかし、あまり気にならなかった…ちらつくのはここにいない彼女だ。
いつも前しか見えていないかのように強い光を宿す彼女の瞳は揺れていた。
思わず、目線を下にずらす。
別に平手打ちに動揺したわけではない。
むしろこれだけで済んだことに驚いているくらいだ。
微かに色を変えた深紅に目が離せなかった。
きっと、同じ理由からアンも動けないでいるに違いない。
今まで星の数見てきたそれは、感慨も無く、一瞬にして流れて記憶から薄れていくものだと思っていた。
今まで、目の前で涙を流すものを敗者だと思い、嘲笑ってきた。
なのに、今感じるこれはとても苦い。
立ちつくしたまま、動くことが出来なかった。

「シューテ、何であんなこと言ったの」
責めるような言葉に振り返る。
「お前なら分かると思うが」

ノアものノアでブラコンだが、ブランもブランでシスコンだ。
「…姉さんは自分から言ったりしないよ」

ノアは強い少女ではなかった。
いつだって、泣いていた。

『帰りたい』

初めて涙を見たのは5歳の時。
ノアは6歳。
自分の傍に控える為に呼ばれた存在。
俯きがちだったノアは与えられた部屋で泣いていた。

『帰りたい』

そんな彼女に二回だけ、実家に戻ることを許された。
一度目は城に来て一カ月後。
ノアは食事に手をつけなくなり、寝込むようになったから。
二度目はノアの母親がブランを宿した時。
それがノアと母親の今生の別れだった。
子供だったノアは母親との面会を嬉しそうに語っていた…母親が危険な状況にあるとも知らずに。
それからしばらくして、泣き虫だった彼女はいなくなった。
城からも、この世の中のどこにも。

「甘やかすから、変われないんだ」

あの表情を見るのは久しぶりだった。
よく泣いて、時たま嬉しい時に笑い、単純素直だった彼女が表情を消すようになって久しい。

そのノアが泣いた。

何度も会うたびに怒らせようとからかって、泣かせてやろうと嫌味を言った。

その度に笑って受け流していたあのノアが泣いたのだ。

ジストールを突き飛ばしたのは間に合わなかったからだ。

笑ってなどいなかった。

身を呈して守る人間に笑う余裕なんてあるはずがない。

あれ程、変えようとしたのに、顔色一つ変えなかったのに。

彼女が何を見たのかは分からない。

ただ、『おもしろくない』と思った。

凍ってしまった彼女を変える何かを見つけた、そのことに。

傷（後書き）

実は王子と顔見知りだったりしました。
何故、ノアがここに来たくなかったのかは残念ですが盛り込めませんでした。
原因はこの王子様ですが。

今回も足を運んでくださったあなたに感謝です。
少しでも面白いと思って頂けるよう頑張りますので次回もよろしくお願いします。

悲しみからの決意（前書き）

またまた更新に間があきました。
そんな白兎のシンデレラにお付き合い頂きありがとうございます。
これからもぜひよろしくお願いします。

悲しみからの決意

１３．

コツコツと規則正しい音が石畳に響く。
今日は屋敷に帰る気にはならなかった。
すぐに招集されても動けるように自室をもらったのだが最低限の荷物しか置いておらず、鞄の中身がなくたって暮らせる。
かといって、借りているアパートに戻る気にもならなかった。
「最悪な気分だわ」
ぽつりと滴が落ちる。
空を振り仰ぐと顔に落ちてきた。
「まるで、アタシの為に降ってきたみたいね」
一度は止まったはずの涙が溢れる。
いつだってそう。
大切なものを失くす時には雨。
「母様、アタシ強くなれません」
心無い言葉に耐えられる程強くなれない。
人を切り捨てるほど冷酷になることもできないでいる。
弱い、あまりにも脆い刃だ。
涙で錆びてしまったのだろうか。

「お兄様」
「何だ、アン」
何だも何もないではないか。
「恐れながら…その態度はあんまりですわ。侍女達が怖がって世話につく者がおりません」
明らかに不機嫌な態度が下に筒抜けなのだ。
「お前はそんなことを伝えに一週間ぶりに来たのか」

もともと厳しい人だがこれではあんまりだ。
事情を知る私ならまだしも知らない者達にもこの態度では寄り付かないのも仕方がないというものだ。
「…報告です、当主」

「…全く、何やってるんだ」
そこにいたのは自分を含め三人。
遠目から見てもやつれた表情の女と車椅子に座る男。
雨に濡れたのだろうか、女の髪と服は体に張り付いていた。
報告通りなら一週間近くあそこにいることになる。

「ノアール」
気が付くと体を濡らす雨が遮られていた。
「…」
「ここにいたのか」
久しぶりに見たその顔はさらに老けたように感じる。
「母様に会いに、来たんです」
町から外れ、荒れた墓地。
それが現在地だ。
「父様も母様に会いに来られたのですよね」
凭れていた場所を開けて、父の後ろに回る。
「あぁ…ただ、体が言うことを聞いてくれなくてね。最近は来れていなかった」
そこにはくすんではいるが手入れされた墓石がある。
荒れきった周りのものと比べるとそこだけ浮いているように見えた。
周りのものより新しいことも理由かもしれないが。
「報告は受けている」

「…申し訳ありません、代理とはいえ主を危険に晒しました」

しばらくの静寂のあと、

「ミアはこんなこと望んでなかった」

母、ミアリルは穏やかな気性で愛情深い人だった。

そんな人が危険を伴うことを娘に望む筈もないことは分かっていた。

それでも、

「アタシは家族を、この家を愛しているのです」

そして、母を死に至らしめた人物に屈するわけにはいかないのだ。

「分かっている。私がこんな状態でなければ、お前にこんな苦労をさせやしなかった」

私は母が死ぬ瞬間に全てを悟ってしまった。

この国に立ち込める黒い霧に。

大事なものをソレに奪われたことで、気付かされたのだ。

「今尚、王家の守り手は狙われているのです。遅かれ早かれ、私も外界へ出たことでしょう」

失ったものは戻らない。

ならば、次は守り、そして根源を絶つまでだ。

「さぁ、一度屋敷へ帰ろう。顔色が悪い」

二人が出口へと、つまりこちら側へ来るのが見えた。

なんとなく、顔を合わせる気にならなくて顔を背け、踵を返す。

眼の端に人の良さそうな、しかし、俺の目が間違っていなければ面白がっているようだった。

「全く、俺は何やってるんだろうな…」

報告書を握りしめ、雨に打たれる。

悲しみからの決意（後書き）

ノア父登場です。

想定外インシデント（前書き）

間が空きに空いてしまいました。
再び訪れてくださった、貴方に感謝です。

想定外インシデント

１４．

「あぁ、そうだ。コレを渡してくれと言われていたんだ」
渡された封筒の一つを開けると今一番会いたくない男の名で括られていた。
しかし中身はと言うと。
「久しぶりの有給なんだろう？少しくらい話に付き合っておくれ」
普通ならあり得ない一週間の有給許可だった。
そして、それは今日が最終日だという。
全く何を考えているのかよく分からない人だ。
どちらにしてもクビにならずに済んだのだし、明日から仕事に励むだけだ。

…どうにも気まずい。
「昼食をお持ちしました」
いつも通りに振る舞う彼女はやはり優秀なようだ。
「そこに置いておいてくれ」
「畏まりました」
こちらに走らせる視線に沿って目線を上げ、聞く。
「他に何かあるのか」
「はい。若旦那もご出席なさると思いますが――――」

「どうして、こうなっちゃったのかしら……」
頭を掻き毟りたい衝動に駆られるが、そんなことをすれば今までの時間は無駄になる。

ただの休暇を貰うだけではなかったのではないか？
天敵の王子どころか腹の裡の読めないジストール＝クジェトリム。
前門の虎、後門の狼とでもいうのか。
「まったく、いつも通りメリーアンと行きゃぁいいのよ！」
招待状を握りつぶし、千切って燃やせるのは夢の中だけであって、
現実は皺ひとつない。
「くぅっ、屈辱だわっ」

「上手く化けたな」
そんなこと言って、彼女が心の裡で盛大に自分を罵っているのが想
像できるし、実際にやってるだろう。
……おくびにも出さないが。
赤みのある髪にはフェリトリア家の色、夕陽色の花が飾られ、若葉
色の細身のドレスと相まって一輪の花のようにも取れる。
周りのご令嬢に比べれば華やかさに欠けているという評価がくだる
かも知らないが、彼女の目的には合っているだろう。
「褒め言葉として受け取っておきますわ」
所作もどこの令嬢にも劣らない。
「では、お手を」
戦争（パーティ）は始まっている。
パートナーに手を差し出し、彼女はその手を当然のように乗せた。

「…ぶしつけな視線ばかり」
貴族は私を蔑むのだ。
爵位に見合う財産も無い、名ばかりの貴族、と。
国民から絞りとって、私腹を肥やしているばかりの癖にと何度罵っ
たことか。
私の呟きは聞かなかったフリをしてもらえたらしい。
内容は違えど、内心は似たようなものだろう。

羨望、嫉妬、利益の計算。そんなところだ、貴族社会なんて。

「王子殿下、この度はご生誕おめでとうございます」

このような場所に来るのは久しぶりなことだ。
「あぁ、ノアールか。久しいな」
こんな場では、と付けられた言葉に顔が引き攣る。
この前無理やり連れてこられた時のことだろう。
「そんなに私に口説かれるのが嫌か？」
えぇ、嫌ですという本音を乗せて、
「そうやってお戯れを仰るのはおやめ下さい、殿下」
他の誰かに聞かれたらどうするおつもりですか。
私は目立ちたくは無いのですよ。
挨拶があんまりにも長ければ後が面倒だと、早々に引き揚げ、壁の花を決め込む……予定だったのだが。
「どうしてこうなっちゃうのかしら」
政治など分かりません、を決め込むので話に混ざれないのは良いのだが、ご令嬢に囲まれなきゃいけないのでしょう。
「想定内だけど想定外だわ」

想定外インシデント（後書き）

想定内と想定外の出来事です。
ここで一波乱起こそうと思うのですが。

苛立ち

「何か、御用でございますか？」

――無いだろう、そんなもの。と言うのが本音だが、ソレは伝わるだろうか。

「まぁ、ご気分でも悪いのですか？震えていらっしゃるわ」

伝わる筈がない、伝える気がないのだから。

まるで木枯らしに怯える様に、か弱い温室の花を演じて見せよう。

常日頃の様子はなりを潜めさせる。

身を飾るだけしか能の無い令嬢などこれでやり過ごしてしまえばいい。

立場が違うのだから。

罵りたいだけ罵り、見下すだけ見下し、優越感に浸らせてやればどこかへ行く。

「外の風に当たってこようと思っていますの。私のようなものには煌びやかな世界は場違いみたいで」

こんなところで油売ってるよりも、外に出てカードを集めた方が有意義なのに。

馬鹿な振りして情報を集めるのも結構骨が折れるものだ。

ひたすら、演技。

ちらりちらりと他のグループから視線が寄せられているのに気が付いているだろうか。

視線には様々な種類がある。

侮蔑の眼、好奇の眼、品定めするような眼、中には同情の眼もある。

まぁ、これだけでも十分な収穫か。

目は涙で潤ませ、胸の前で組まれた手は私は抵抗なんてできませ

んと雄弁に偽りを語る。

「それにしても身の程知らずではないこと？」

「ですわよねぇ……どうやって誑し込んだのかしら」

先程まで私の姿が貧相だとか、名ばかりの爵位だとかのお決まりの嫌味だったのだが、急に様子を変えた。

どうやら、出世頭の伯爵のエスコートで現れたことによるものらしい。

確かに、王子の教育係は未来の宰相となる可能性が高いし、若い代理伯爵が王の信頼をも勝ち取っている様はご令嬢からすれば、良い婿候補だろうし。憧れを抱く人もいるのではないか。

今日はこっちの方が本題かな、とげんなりする。

予想通りだからって嬉しくない。

「王子殿下の生誕パーティの招待状が当主代理の私にも届いているのです」

なので休暇を頂きたく思います。

それで許可が下りて終わりだと思っていた。

「その必要はない」

即答で却下され、

「俺と一緒に行けば問題ない」

爆弾投下。

令嬢たちに目の敵にされる面倒な状況が目に見えていた為に断ろうとも思ったのだが。

「これは決定事項だ」

一週間の休暇は何の為だと思うか？とまで言われると、嵌められ

た感が否めない。

「私達の話、聞いていましたこと？」

正直、聞いていない。

……帰りたい。

「彼女が、何か粗相でもいたしましたか」

完全に別行動だと思っていただけに突然現れた若旦那に、何をしに来たのだろうか、としか思うことができない。

まるで、壁にでもなるように令嬢と私の間に入る。

今まで見たことのないくらいの笑顔。

「あまり、良い雰囲気では無いようですが」

その仮面で隠す感情は苛立ち、何にそんなに苛立っているか知らないが。

令嬢達の表情は若旦那の背によって見えない。

先程から、囲まれているノアから目を離せない。

「失礼」

会話の途中ではあるが頭には苛立ちしかない。

何故、言い返さないかなんて頭では分かっているのだが。

つい、いつもと違うノアに苛立つ。

「俺には口答えしてばかりの癖に」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7981p/

雇われシンデレラ

2011年10月8日13時36分発行